図書紹介

『英霊に感謝し日本人の誇りを取り戻そう』私家版

柿谷勲夫 陸自62 著

徳田 八郎衛 陸自61

防大教授等を歴任し、国防態勢の根本的欠陥（ボタンの掛け違い・英霊に沈黙・武人軽視等）と克服の方向（占領・敗北史観からの脱却・自主憲法制定等）について「正論」「WILL」等に寄稿を続けてきた著者の活動集大成が本書である。何冊も上梓してきた展転社からの出版だが、生い立ちや経歴も詳しく記しているためか、これは私家版である。

発表論文との重複も多い本書の概要は割愛するが、本書の圧巻はマスコミ、特にNHKの歴史観との対決の記録だ。終戦特集で日本を非難する国だけを放映し、植民地からの独立のため日本と共に闘った国々を何故伝えないのかと担当者に迫る著者は、とうとう「第4の権力」を受信解除してしまう。だが評者が記したいのは、平成20年2月のイージス艦「あたご」と漁船「清徳丸」の衝突事故の顛末を必死に追う著者の姿だ。

マスコミの自衛隊叩きに引き摺られるように福田康夫首相も石破茂防衛相も「緊張感の欠如」と現場を非難する。

防衛省は平成20年版白書で「あたごに回避の義務があったが適切な措置をとっていない」と記し、翌年1月の横浜地方海難審判庁の裁決を受けて4月に検察が衝突前後の当直士官2名を在宅起訴するや両名を休職に処した。続く5月には事故調査委員会の報告書を公表し、艦長と当直士官2名の停職を含め乗組員38人を処分する。

ところが同23年の横浜地裁の1審も同25年の東京高裁の2審も「あたごに回避義務があったとは認められない」として両被告を無罪とする。画期的な判決なのに海幕長から労いの言葉もなく、停職処分の撤回もないままであった（処分変更による停職日数の短縮のみ）。著者は「これでは現場が上層部を信頼できなくなる」と嘆き、読売新聞連載の「冤罪のち次官村木厚子」の熟読を上層部に薦める。

青年時代と変わらぬ正義感に満ちた、これらの報告と主張をより多くの国民に伝えたいものである。

（靖國偕行文庫で閲覧可能）